

平成27年度現代保育研究所 第2回研修会

保育実習の効果的な実践に向けて

平成26-27年度専門委員会課題研究報告
学生の自己成長感を保障する保育実習指導のあり方
—保育実習指導Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを中心に—

松島 京

(近大姫路大学／全国保育士養成協議会専門委員)

2015.11.28

1. 調査研究の課題設定



はじめに

▶ 平成23年

保育士養成 改正カリキュラムの運用開始



▶ 教科目の再編・名称や内容の変更

▶ 保育実習の単位の変更

保育実習におけるカリキュラムの変化

旧カリキュラム

保育実習
(**実習指導**含む)
5 単位

保育実習Ⅱ 又はⅢ
2 単位

改正カリキュラム

保育実習Ⅰ 4 単位

保育実習指導Ⅰ 2 単位

保育実習Ⅱ 又はⅢ
2 単位

保育実習指導Ⅱ 又はⅢ 1 単位

保育実習カリキュラム改正のポイント

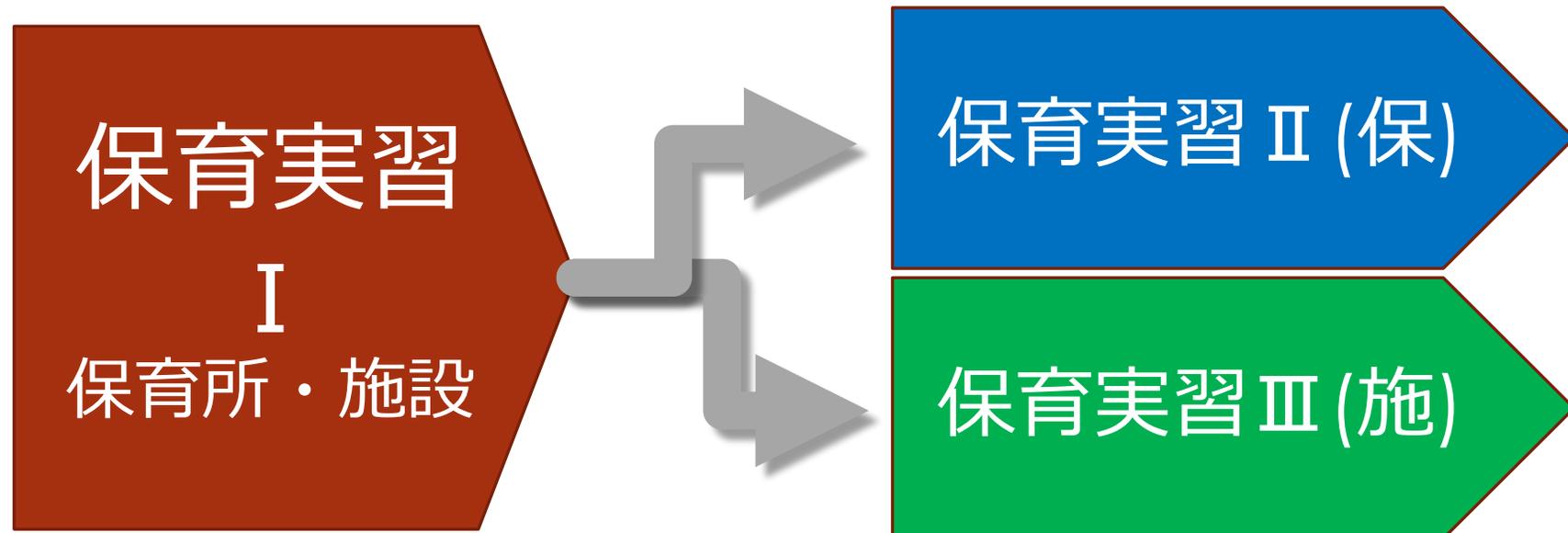
- ➡ 実習の事前事後指導の充実
- ➡ 事前事後指導による学びの強化
- ➡ 実習における効果的学習を行う

**実習および実習指導の
充実化が求められている！**

3つの職種と比較した保育士養成における 実習システムの特質

保育士養成における実習システムの特質とは何か？

- ➡ 段階的に展開する実習プログラムを有する点



段階的にステップアップする実習システム

3つの職種と比較した保育士養成における 実習システムの特質

このような特質を持つ保育士養成の実習プログラム

- ➡それを指導するための「保育実習指導Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」
はどのように行われているのか？



調査の背景

実習指導の「今」をとらえる試み

- 実習指導の充実化は図られているのか？
- 保育実習および保育実習指導ⅠからⅡ又はⅢへの指導の連続性・発展性はどのようになされているか？
- 学生の自己成長感は保障されているか？

2. 質問紙調査の目的と方法



調査の目的および方法

調査の目的

➡ 調査の名称

「保育実習指導の充実化に向けた調査＜保育実習担当教員用＞」

「保育実習指導の充実化に向けた調査＜保育実習担当以外の教員用＞」

➡ 調査の目的

「保育実習指導Ⅰ」と「保育実習指導Ⅱ又はⅢ」の指導内容の連続性および階層性に着目

“学生の自己成長”を実習指導を検討する軸の一つに

- ①養成校における保育実習と実習指導の充実を図るために、**教員が学生の実習に関わる過程においてどのような実習指導を行っているのか**
- ②**学生の自己成長をどのようにとらえ指導内容に反映させているのか**

調査の目的および方法

調査の方法

▶ 調査対象

全国保育士養成協議会に所属する保育士養成施設511校のうち、平成26年度には最上級学年のいない22校を除いた489校。

保育実習担当教員および保育実習担当以外の教員で、現在の養成校に2年以上在籍している教員。1施設各1名。

▶ <保育実習担当教員用>

保育実習指導科目を担当する専任教員。

現在の養成校に2年以上在籍している教員。

▶ <保育実習担当以外の教員用>

保育実習指導科目を担当していない専任教員。

現在の養成校に2年以上在籍している教員。

調査の目的および方法

調査の方法

➡ 調査の実施方法

質問紙配布—養成校に実習担当教員・非担当教員用各1通を郵送配布
質問紙回収—各教員が封入した回答を郵送で直接回収

➡ 調査期間

平成27年2月～3月

➡ 回収率

	発送数	回収数	回収率	分析対象
養成校	489校	287校	58.7%	
実習担当教員		286名	58.5%	283名
非担当教員		272名	55.6%	271名

3. 質問紙調査の結果から

実習指導の「今」をとらえる試み

- ➡ 1. 養成校は今、
 - ➡ 2. 実習指導体制
 - ➡ 3. 実習指導内容
事後指導の内容と方法／実習指導のねらい
 - ➡ 4. 実習を通じた学生の成長感
- +
- ➡ ヒアリングに続くものとして、
実習指導の連続性・発展性のための工夫点

養成校は今、

所属校の概要

会員校数

330校→489校 約1.5倍増

校種

回答校のうちの4年制の割合 13.0%→34.6%

学生定員

- ➡ 急激な養成校の開設と、4年制の養成校の増加
- ➡ 新規採用教員の多さ
- ➡ 保育の現状や学生の現状に対する認識不足を実習先から指摘

実習指導体制（1）

実習指導担当教員

総人数

担当教員数は平均4.3人 やや増加

指導分担

保育所と施設担当、保育所と幼稚園担当は別傾向
ⅠとⅡ、ⅠとⅢは同一担当者が多い

教員組織

実習指導検討組織あり54% / 担当に一任13%

実務経験者

保育・福祉分野の実務経験者が含まれる割合は約90%

- 少数の担当者に任すのではなく、保育現場の実態をふまえ、チームを組んで実習指導に取り組む体制が指向されている

実習指導体制（2）

訪問指導

実施体制

76%が学科教員全員で訪問指導

内容把握法

報告書と必要に応じて口頭で59%

- 学科全体で実習訪問指導に取り組むことが訪問指導の主流
- 報告書作成は必須事項
- 話し合いや情報交換の機会をもつだけでなく、「学内メール」など、多様なツールを活用して情報を共有し、訪問指導の充実化を図る

実習指導体制（3） 実習非担当教員の関与

保育実習とのかかわり

実習指導授業関与

訪問指導関与

訪問情報共有

28%が実習指導科目の一部を担当
91%が訪問指導担当
84%が訪問指導情報を共有

実習指導授業の一部を担うことで、
「実習指導内容理解」は高くなり、
訪問指導の情報共有もすすむ。
「実習を意識した授業展開」がされ、
「実習に向けた課題や振り返り」も
なされていた。

保育実習とのかかわり

実習指導授業関与

訪問指導関与

訪問情報共有

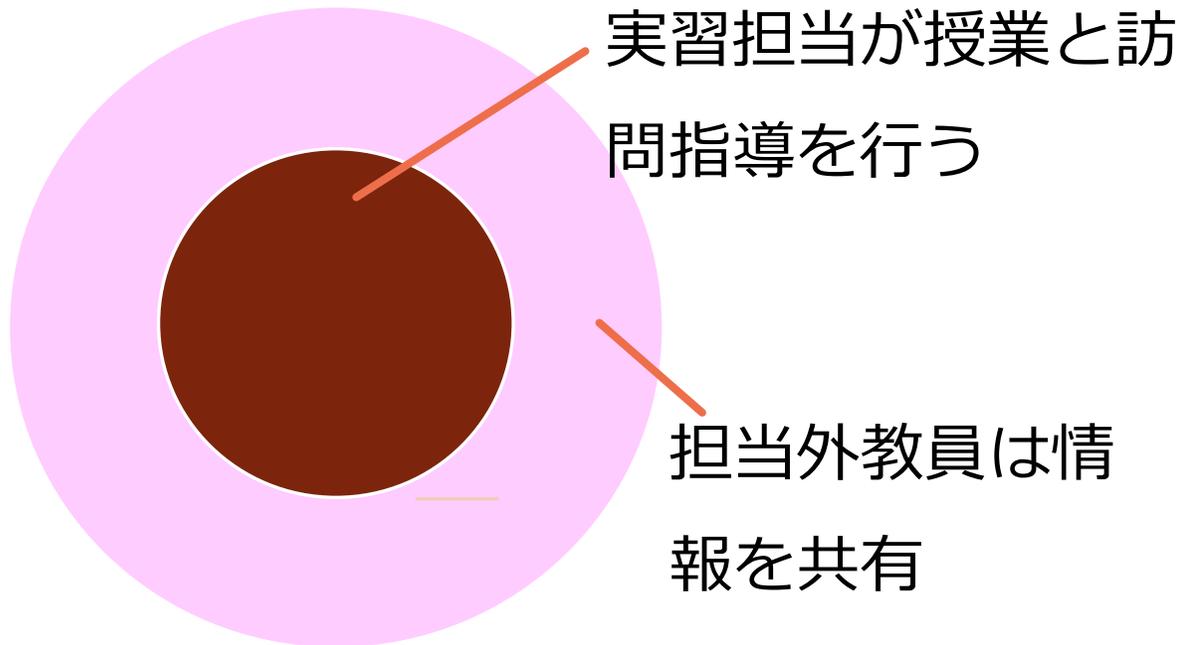
訪問指導の情報共有ができている教員ほど、「実習指導内容理解」、「実習を意識した授業展開」、「授業内での実習に向けた課題や振り返りの実施」、「訪問指導の内容の授業反映」の割合が高い

- ➡ 単に全員で訪問指導を行うのではなく、その**情報を共有し話し合う機会**をもつことが重要
- ➡ 4年制養成校の非担当教員では、「訪問指導の情報共有」、「実習指導授業内容の理解」、「実習を意識した授業展開」、「実習に向けた課題や振り返りの実施」など、実習自体への意識が低い傾向がある
 - ➡ **授業終了後に実習を行う4年制カリキュラムの課題**

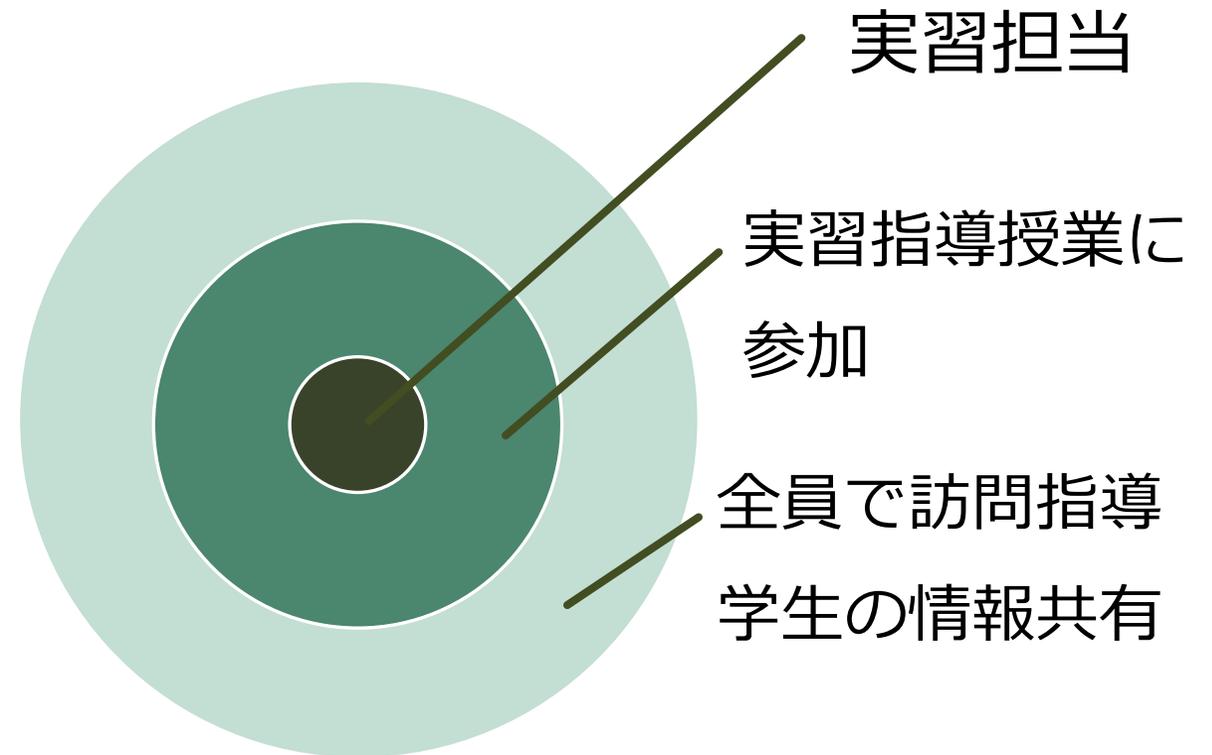
実習指導体制（5）

誰がどのように指導するのか？

A. 実習指導の専門性を意識したモデル（社会福祉士、介護福祉士、管理栄養士など）



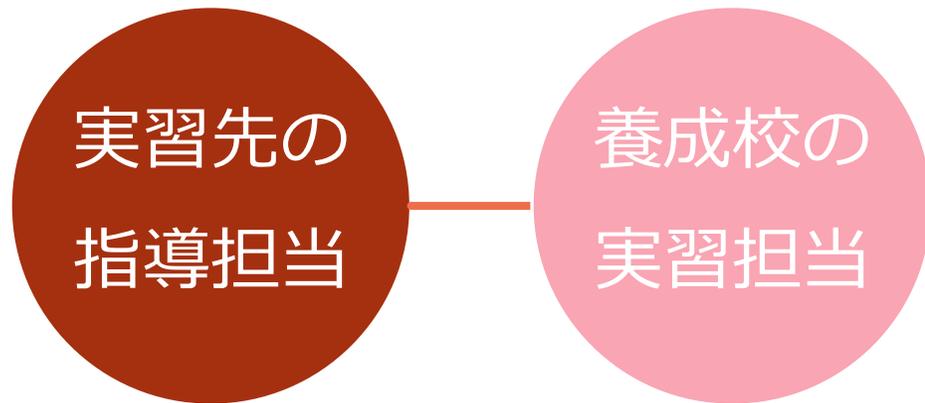
B. 学科全体で実習に関与し養成するモデル（保育士）



実習指導体制（5） 実習指導の専門性をどう考えるのか？

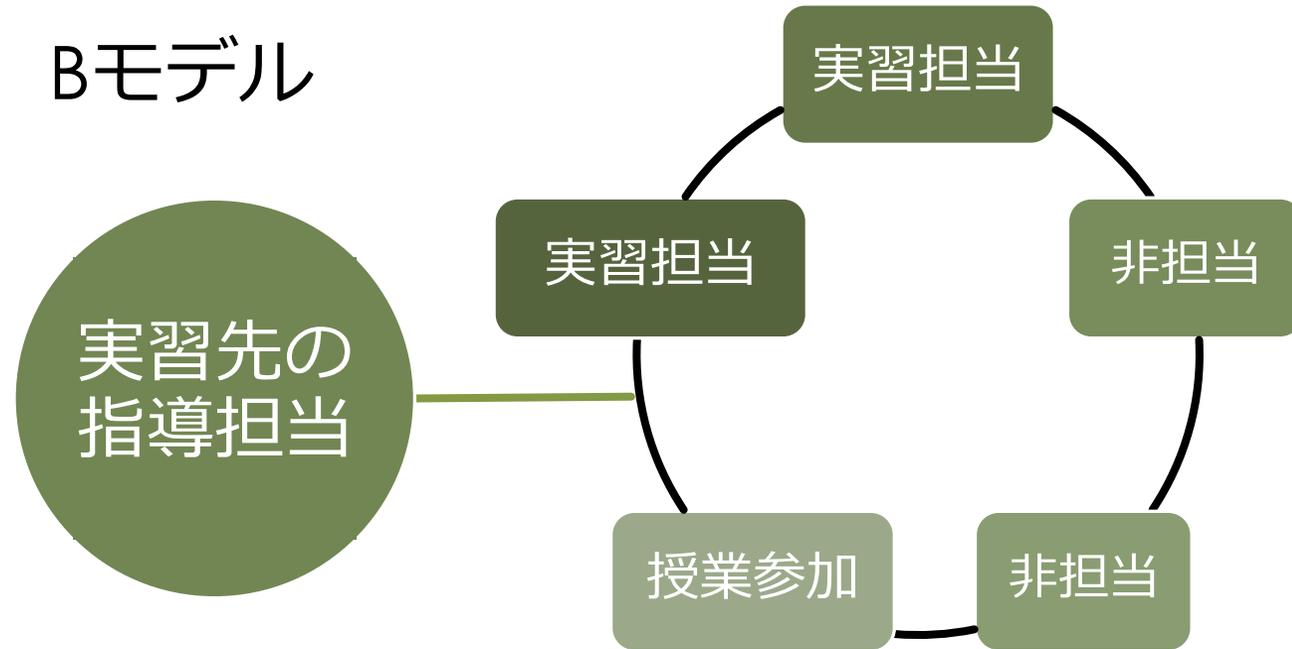
保育士の専門性向上をどのような体制で実現しようとするのか？

Aモデル



実習内容の標準化と相互研修による専門性向上と質の確保

Bモデル



学科内カンファレンスおよびネットワーク構築と実習内容を反映した授業展開

実習指導内容（１）シラバス実施状況

	保育実習指導Ⅰ	保育実習指導Ⅱ	保育実習指導Ⅲ
取 ま 十 つ あ 分 て 時 間 を ま あ	実習生としての心構え	実習の総括と自己評価	保育の概要
	実習の内容	保育に対する課題や認識の明確化	実習の目的
	実習の目的	実習の目的	実習の総括と自己評価
他 の 科 目 と の 連 動	子どもの人権と最善の利益の考慮	保育の表現技術を生かした保育実践	子どもの保育と保護者支援
	プライバシーの保護と守秘義務	子どもの保育と保護者支援	保育の表現技術を生かした保育実践
	実習における計画と実践	子どもの状態に応じた適切な関わり	子どもの最善の利益を考慮した保育の具体的理解

実習指導内容（２）シラバス実施状況（つづき）

- 実習指導は「保育実習指導」の授業内で完結するものではない
 - ➡ 当該領域の授業で、より専門性の高い内容を扱う
「保育実習指導」が、実習オリエンテーションと保育者基礎力アップの授業になってしまわないか？
- 実習指導は実習担当教員だけで完結するものではない
 - ➡ 「保育実習指導」に各領域の教員が参加する
実習に依拠した各領域の専門性追求により、実習内容の充実が図られる？

実習指導内容（2）シラバス実施状況（つづき）

- ▶ 「保育実習指導」授業では、何を指導しようとするのか？
- ▶ 学生から「保育実習指導」授業はどのように見えているか？
- ▶ 対人援助職の専門性とその資質向上にかかわる課題ではないか？

事後指導の内容と方法

- 実習指導の授業において、事前指導の必要は自明であるが、事後指導はどのようなされているのか？
- 実習体験を学生自身が意味づけ、自己課題を見出し、次の実習に対して目標を明確にして臨むという、Ⅰ→Ⅱ・Ⅲ、実習生→保育者への架け橋になるのが、事後指導（振り返り／省察）である
- 「実習の総括と自己評価」、「新たな課題と学習目標の明確化」といった事後指導項目は、多くの授業外の時間の中で、学生の個別性と全体性を考慮に入れて、連続性を意識した形で実施されている

事後指導の壁

- ▶ 実習事後指導を授業外で行う／行わざるを得ない状況がある
- ▶ 「授業外の時間にグループまたは個別指導を行う」「授業外のコマを取って全員で行う」
 - ➡ 個別性の高い体験の振り返りを学生の課題や体験した内容に応じて、丁寧に行っている
 - ➡ 授業外にせざるを得ないカリキュラム状況に置かれているからではないか？
 - ➡ 実習担当教員のシャドーワークになっていないか？

事後指導の壁（2）

- 実習と実習指導の充実化のために「保育実習指導」の独立化・単位化が図られたが、現実は・・・
- 事前／事後指導を網羅できる授業にするためには、どのようなカリキュラムの工夫を行えばいいのか？

事後指導のツールと方法 連続性／発展性を意識して

- 事後指導のツールとして、「実習ポートフォリオ」「履修カルテ」など、2年3年4年間の学習の積み重ねの中での知識・技能の獲得や対象理解の深まり、実習に際しての意識の変化などを、学生自身が記録することを通して確認していくようなツールを用いる傾向がみられた。（修業年限の長い4年制養成校の特徴）
- 学生自身が自己の学びを認識し、自己の成長を確認できる有効性の高い方法とツールはあるか？

教員がとらえた実習を通しての学生の成長

■教員がとらえる学生の成長の内容

①保育者基礎力 →成長しなかったことの基準として。

②変化 →具体的な成長の内容だけではなく、変化の有無に焦点化されている。

③専門的知識・技術

→担当教員は、知識・技術をより領域特徴的にとらえている。

→非担当教員はより一般的な知識・技術としてとらえている。

教員がとらえた実習を通しての学生の成長

- ▶ 実習が成長の契機となり、自己覚知、自己認知、職業としての適切性の検討が促されることには異論はないであろう。
- ▶ その成長を、教員がどのようにとらえているのかは、実習によってどのような力を育てようとしているのかという、養成校が目指す保育者像であり養成の理念の反映であろう。
- ▶ 学生がどこに自己成長を感じるかは、教員が何を保育者の専門性にとらえ、どのような側面での成長を期待しているのか、それをどのように実習指導に反映させているのかということと表裏一体となっているのではないか。

教員がとらえた実習を通しての学生の成長

- 保育者基礎力が最も回答が多い内容であったり、具体性の乏しい変化のとらえで、保育者の専門性向上を目指す実習指導がなされているといえるのか？
- 教員が保育現場と協働して実習指導にあたらうとするとき、その中心に学生自身の実習への主体的取り組み意欲と成長感を置かなければ、主人公不在の協働とになってしまうだろう。

保育実習Ⅰから保育実習Ⅱ・Ⅲへの連続性・発展性を図るために工夫していること（自由記述）

- 実習の記憶が鮮明な早い時期に事後指導を行う
- 実習指導にかかわる者との間の共通理解のために科目間の連携、実習施設との連携を図る
- 異なる種別での実習体験の積み重ねによる個々の学生の対応力の向上をとらえることの必要性が指摘 etc.

保育実習Ⅰから保育実習Ⅱ・Ⅲへの連続性・発展性を図るために工夫していること（まとめ）

実習を通しての学生の成長がもたらされるためには；

- ▶ 【実習事前指導－実習－実習事後指導】という一連の流れの中でタイミングよく指導が行われること
- ▶ 実習指導の内容と方法が適切であること



実習および実習指導のシーケンスの検討が教員側の重要課題
実習指導のねらい、振り返りの方法とその意義、関連教科との連携についての一層の明確化、具体化により、学生からみて分かりやすいものにする

4. ヒアリング調査（経過報告） 保育実習の効果的な実践に向けて

平成27年度の専門委員会の活動 ヒアリング調査の実施

協力申し出校 78校

- ▶ 実習と実習指導のシークエンスの工夫
 - ▶ 実習指導の連続性を図る工夫
- のインタビュー
- ▶ 実習指導の実践を共有することで討議の場をつくり、
保育者の専門性と養成の質向上につながっていくように。
 - ▶ 多様性を尊重しながら。

平成27年度の専門委員会の活動 ヒアリング調査の実施

➡ 現在、ヒアリング実施/分析中

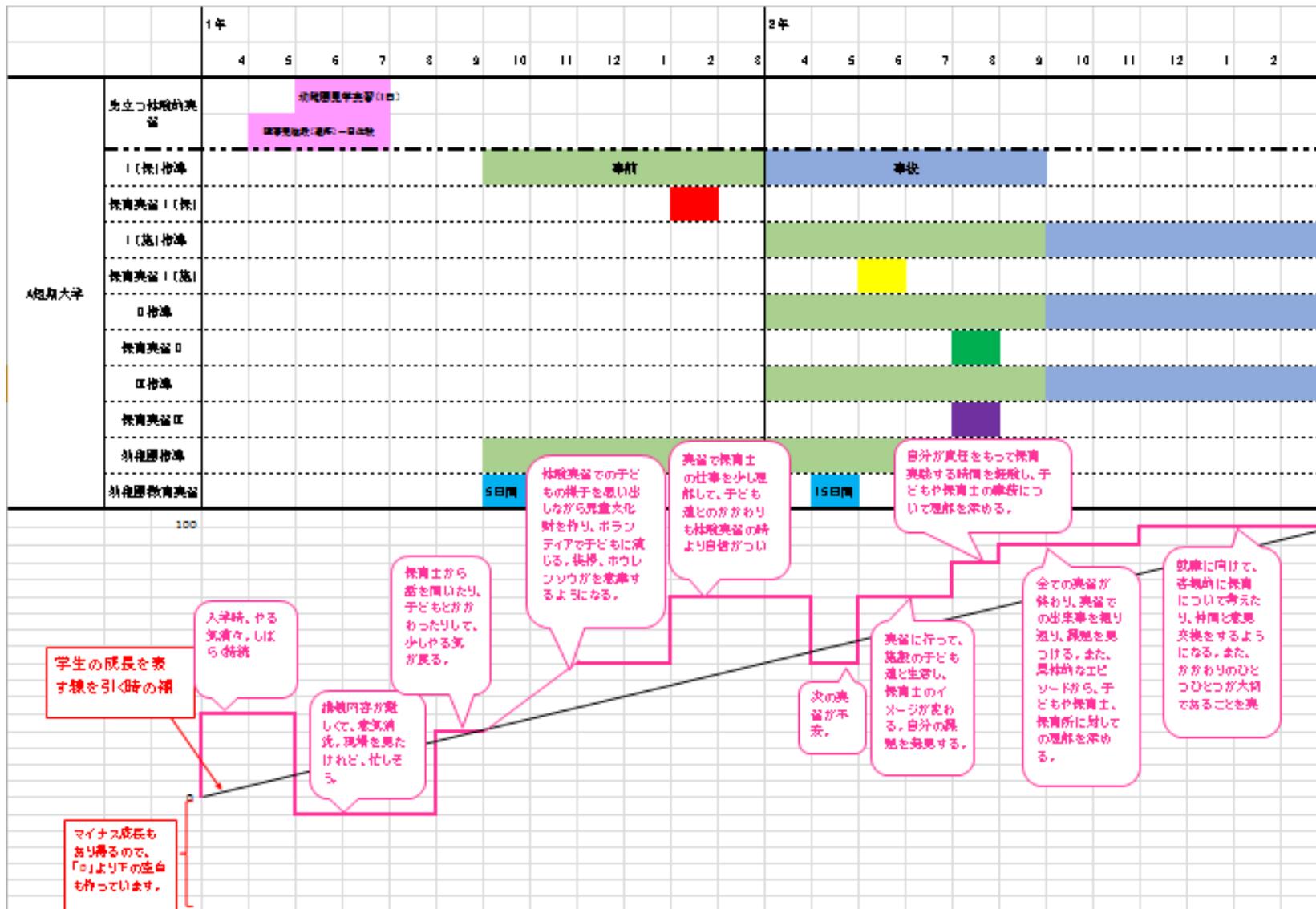
＜ヒアリングの主な項目＞

➡ 保育実習の連続性を保障するための工夫について

➡ 事後指導の内容や工夫について

➡ 学生の成長曲線と、それに対応する実習の事前指導/
事後指導の位置づけについて 等

平成27年度の専門委員会の活動 ヒアリング調査の実施



このようなチャートを用い（書き込み）ながらお話をうかがっています

保育実習の効果的な実践にむけて ヒアリング調査の実施（経過報告）から

<共通して見えてきたこと①>

- 学生の成長を意識した実習/実習指導の流れ
- 学生の成長を意識した他の教科目との連動
- 保育現場との協働：プレ実習やボランティア等の設定

- 学生自らが成長を意識できるツール
- 学生が能動的に実習に取り組んでいく仕組み

平成27年度の専門委員会の活動 ヒアリング調査の実施（経過報告）

＜共通して見えてきたこと②＞

- ➡ 保育者としての意識を初年時より育む
- ➡ 卒業後までを見据えた成長曲線を描く
- ➡ 担当者が「学生の成長」を実感しているポイント

- ➡ 「特徴（良い取組みや工夫）」の背景にある・・・
- ➡ 制限・資源・限界・課題

保育実習の効果的な実践にむけて ヒアリング調査の実施（経過報告）

- ➡ 平成27年度専門委員会課題研究報告書（平成28年6月発行）に向けて
- ➡ 保育士養成校における保育者の専門性と養成の質向上につなげるために
- ➡ 学生の視点から「自己成長」を捉えなおす
- ➡ 保育実習の持つ連続性/展開性とは
- ➡ 保育実習指導Ⅱ・Ⅲの位置づけとは

調査結果内容の詳細について

- ▶ 平成26年度専門委員会課題研究報告書（平成27年8月発行）
- ▶ 平成26年度専門委員会課題研究報告（平成27年度全国保育士養成セミナーにて実施）のスライドは全国保育士養成協議会Webサイトにて公開
- ▶ 平成27年度専門委員会課題研究報告書（平成28年6月発行）



ご清聴ありがとうございました

平成26-27年度専門委員会